明治の佐伯三青年 34

龍渓・鳴鶴・鶴谷

御手洗　一　而
（賛助会員・川越市小堤）

矢野の政界引退と憲法制定

矢野は大隈から再三政府入りを勧められたが拒み続けた。矢野は確かに疲れていた。洋行から帰国した矢野は精根傾けて報知社の再建改革に奔走し、その間改進党を預かって、党の立場から国政を監視して休む暇もなかった。矢野自身の言葉を借りると、

「誰からも頼まれもせぬに、独りで国事を憂い、地位や年齢以上にやきもきして、役にも立たぬ苦心をなしてきたのである。実際自身の本分以上に心身を苦しめた」

と述懐している。

矢野は心身の静養を図ると共に、暫く自分の時間が欲しかった。この年矢野は三十八歳になっていた。矢野は疎遠になっていた先輩友人たちに旧交をあたためることから身辺を整理すると、ある日、恩師の福沢を三田に訪ねた。

応接間に顔を出した福沢は、矢野の顔を見るなり

「よおぅ。大臣のお越しか」

と、少しは皮肉を込めて白い歯を見せた。

矢野は、「民間大臣」のあだ名まで、既に福沢さんの耳に入っていると苦笑したが、長い間の無沙汰を詫びると、改めて大隈入閣の経緯を説明した。

「いろいろな噂は流れているが、わたしも一つの見識であったと思っている」

福沢はうなずいていた。

「私もそのつもりで皆に諮りましたが、事が成就してみますと、後藤さんの大同団結を警戒するあまり、政府が改進党を取り込んだとか、改進党の方から手を結んだとか、うるさい風聞ばかりで、小さくなっております。

矢野も噂は気にしている様子であった。

「なに、気にすることはあるまい。言いたい奴には言わせておけばよいが、要は国の方向を誤らぬことじゃ。大隈さんは国是には筋を通すお方じゃ」

福沢にこう言われて、矢野は幾分ほっとしたが、話の

ついでに、例の覚書の一件を披露した。
「その代り、大隈さんの入閣に際して、伊藤さんに一つの交換条件を提示したのです。国会開設後は、選挙の結果によって、最も多くの議員を獲得した政党の総理が内閣を組織するという条件ですが、勿論時期尚早で実現不可能なことですが、伊藤さんは一笑に付しながら、その覚書をストーブに投げ込んで焼いてしまったそうです。大隈さんの話によりますと、伊藤さんのその時の言い種がおかしくてー」
「伊藤は何と言ったのか」
「黒田さんを加えて、三人で夜な夜な会うだけでも人目をはばかるのに、こんなものでも見つかれば、大権をないがしろにする謀反の反逆罪に問われかねんと言ったそうです」
「伊藤らしいや。少しは気が緩めるのかな」
「大隈さんもあの用心深さは見習わねばならぬと、笑っておりました」
「そりゃおかしいのう。伊藤も正直に内閣だけはまだ薩長から手渡したくないと宣言すればよいにのう」
福沢も笑っていたが、覚書については真顔になっていた。
「さすがに英国議会を見聞した矢野君らしい。日本の内閣もそうならねば、何のための維新か分からぬ。改進党の覚書として伊藤に暗示を与えただけでもよいではないか。やがて正論の通る日が来るわい」
福沢はこう結んだが、思い出したように大同団結の話になった。
「大同団結と言えば、あの勇ましい犬養は後藤の惟幕に走ったそうじゃのう」
矢野は内心福沢さんが何でも知っていると思った。
「はい。犬養につきましては、藤田と共に再三にわたって引き止めたのですが、なにしろあの性分ですからー」
「そうかもしれぬ。人それぞれに主張があるからのう。ただし、犬養はありゃ後藤型じゃわい。大隈型じゃないかもしれぬぞ」
この頃の犬養を評して、福沢が後藤型だと指摘するとこの時ばかりは、矢野も声を出して笑った。
それから、話が藤田や荘田の洋行話に及ぶと、福沢も子供の話になった。
「わしのところも、一太郎や捨二郎がアメリカへ渡って

から既に数年経つ。今年は帰国するというから、ヨーロッパを廻って来いと手紙を出しておいた。ヨーロッパはまたアメリカと違う。見聞はあとになって人生の役に立つものじゃ。そうであろう矢野君」

福沢も子供の話になると、親の顔になっていた。

師弟の会談は、久しぶりの会合とあって、子供の話から洋行の話、遡って塾時代の思い出話と続いたが、話が人生論になると、矢野はふと思い出したように帰郷を打ち明けた。

「この際、新聞社の方も目処がつきましたので、暫く東京を離れようと思っております。雑事から離れて故郷の水でも味わってこようと思っております」

「それは結構。新聞の方も目処がついたか。それは大したものだ。静養も気分転換になる。政もよいが、健康が第一じゃ。わしも大分故郷にはご無沙汰してるわい」

福沢も故郷を偲ぶふうであった。

「この機会に、もう一度人生を見詰め直してみたいと考えております」

矢野は福沢の人生論を受けて、しみじみとこう語った。

「それがよいかもしれぬ。新聞社の仕事に改進党まで背負わされては、息つく暇もないわい。人生はあせってはならぬのじゃ。努力しても出来ぬ相談はある。矢野だから話すが、明治十四年の改変に、あれだけの大喧嘩をした伊藤と大隈が無節操にもまた手を結んだ。政治には許されるといえばそれまでだが、一般大衆の評にも真理はある。わしには出来ぬ相談じゃ。性に合わぬ」

大隈の入閣に動いた矢野にとっては、ぐさりと胸に刺さる福沢の言葉であった。

「たしかにー」

矢野には返す言葉がなかった。

「人生は大事にせねばならぬ。わしは、矢野は大隈の勧誘は拒めぬと思っていたのだがのうー」

福沢はこう言って、声を出して笑った。

六月一日、政党の大同団結を画策する後藤象二郎は、機関紙『政論』を創刊したが、矢野は一寸眼を通しただけで頓着なかった。矢野は福沢に会ってから、夜は一人で書斎に閉じこもり、考え込む日が多くなっていた。

ー福沢さんは、大隈の入閣に対して、当初から反対はしなかったが、改進党の立場と違って、個人的には性に合

わぬとして、大隈さんというよりも、政治家の無節操な破廉恥を非難され、人生を大事にしろと忠告してくれた。

矢野はその言葉を考える度に、福沢さんは事もなげに自分の思いのままを言い放ったが、案外師として矢野自身の性格まで見通しているのではないかと思い当たることがあった。矢野は少年の頃から、父や祖父によって、将来政治家になるように教養されてきた。そのために、本人の述懐談にあるように、

「教養の力は実に恐るべきもので、本性なまけ者であるわが輩をして、遂に全く政治趣味の人にならしめた」。

が、維新成ってまだ二十年。この時代はまだ憲法も定まらぬ時代で、生やさしい政界ではなかった。西郷・大久保然り、翌年には大隈も外務省の門前で襲撃される。政治家にとっては命懸けの時代であった。それだけにこの頃の政治家は、反対論者にお構いなく、国益のためには、唯々果断実行を要求される時代であったが、矢野にはそれが乏しかった。矢野はあくまでも学究肌の人で、戦国武将にたとえても、武断派にはなりきれなかった。

矢野はこのことも述懐している。

「わが輩は元来、事物を深く考究するのを好む性癖がある。国事の大体、国家の行く末、社会の組織等についてもう少し深く静かに考えてみたいのに、何分今までのような繁忙ではこの望みは遂げられない云々」

矢野の学究肌の性癖と、泥にまみれ、時には清濁あわせのむ政界の馴れあいは、次第に矢野をしてうとましく感じさせるようになっていた。一方、矢野が号する「龍渓」の著述も脳裏をかすめ、深思静慮の時間と自らの人生とが交錯して、矢野を悩ませた。

こうして矢野は、悩み考えた末、一旦政界からの引退を決意した。

やがて矢野は、心身の静養を理由にして、この引退を天下に公表するや、時の日本新聞は、

「世は龍渓を捨てざるに、龍渓は世を捨てたり」

と、失望を記事にする有様であった。

藤田は、後藤の傘下に入った犬養を説得するため、二度三度矢野に会う度に、矢野の今日あることを察していたが、突然の公表に驚いて、早速矢野邸を訪れた。

矢野は引退を公表したせいか、晴れ晴れとした顔をし

ていた。
「矢野さん。報知社も心配なければ、何も大げさに引退を公表する必要はなかったのではないでしょうか。半年でも一年でも気のすむまで休まれればよかったのにー」
藤田は心からそう思っていた。
「茂吉。それも重々考えたが、休み中に通信で追い回されるのもかなわぬのじゃ。ここは一つの区切りと思って決断した。全てを洗い流して、もう一度自分や社会を外から見直してみたい。国へのご奉公はまた別の道もあるわい」
矢野にこう言われると、藤田もこれ以上追及しなかったが、一言つけ加えた。
「世間はなかなか龍渓を捨てませんよ」
これには矢野も苦笑した。
「それで佐伯にはいつ発たれますか」
「あまり暑くならぬうちに発ちたいが、折角の気ままの旅じゃ。京や大阪に立ち寄って、気のむくままに下ろうと思っているが。ところで、茂吉の方は洋行の日取りは決まったか」
矢野は問い返した。
「先日荘田さんにお会いした時、年明けの便ということに決めました」
「それはよかった。いよいよ洋行だな。欲張って何でも見てくるがよいが、出発までには帰ってくるわい。盛大な送別会をやらねばのう」
送別会と聞いて藤田は軽く頭を下げた。
「矢野さんも久しぶりに好きな鉄砲が撃てますな。佐伯の旧友達にはよしなにお伝え下さい」
こうして、二人の話は、自然に故郷佐伯の話になっていた。

矢野は真夏の暑さを避けるように早目に東京を出発し一方、藤田は洋行の準備に取り掛かった。
矢野の政界引退は時宜を得ていた。勿論矢野にとっては、すべての情勢を見越しての引退であった。矢野は改進党を去ったが、大隈の入閣によって、改進党は再び春を迎えていた。しかし、政府と改進党の連携は、野にあって大同団結を唱える後藤派をますます刺激した。ここで後藤は、大同団結を更に全国組織に発展させるため、全国遊説を計画し、東北へ向けて出発した。

当時の後藤は、

「我国に於ては未だ元老政治家にして正論を以て獄に繋がれた者は無い。余は甘んじて獄裡の人となり、一身を犠牲にし政界の革新を促さん」

と激語し、行く先々で国家の危急存亡を訴えたため、世人からは「危急存亡伯」と呼ばれるほどであった。後藤の大同団結の要旨は、内政外交を細かく説明し、各地方団体を前にして、議会開設の迫る今日、政治上の糾合を謀って、代議制度の準備に速やかに着手せよと同意を求めるものであった。

後藤の行動は、連日各新聞紙上を賑わしたが、この頃枢密院を創設した伊藤は、憲法草案の審議を重ね、附帯法令についても各顧問官の意見を纒めつつあった。

こんな時、八月十四日に、藤田は昨年の長女に続いて男の子を授かった。藤田は、この次男を「徹（とおる）」と名付けたが、子供にばかりかまってはおられなかった。洋行準備の合間に、矢野が去ったあとの改進党の党務を見るために、しばしば報知社に足を運んだが、矢野がいなくなった社の空気が一変しているのが気掛かりであった。社全体に緊張感が無く乱れているというよりも、わが世の春を謳歌する改進党の壮士達が、どこからともなく集まり、勝手にのさばっては、民権運動華やかなりし頃を髣髴とさせる状態であった。

矢野はこの無統制を嫌って改革した。新聞本来のあり方は勿論であるが、社としての経営が成り立たねば、言論活動もあり得なかった。藤田は今更ながら矢野の力を思い知らされる思いだった。藤田はそれとなく三木善八や矢野の弟の小栗貞雄を呼んで注意したが、二人とも、喜んで集まる壮士達を見ては、追い出すわけにもいかぬとほとほと困りきっている様子であった。

この頃矢野は、京都・大阪を廻り、郷里大分県の佐伯へ帰り、雑事から開放されて、故里の人情を楽しんでいた。なぎの日には、佐伯湾に小船を出して釣りを楽しみ夜には竹馬の旧友達が集まり、酒を酌み交わしては詩に興じた。

志業未成鬢欲班　倦遊両度入郷関
故山猿鶴定相笑　空有姓名伝世間

当時の龍渓の漢詩が残されているが、秋になれば、いよいよ待望の銃猟が待っていた。

後藤は東北・信越を遊説して、八月二十二日、一旦東京に帰京したが、各地の歓迎ぶりは、侮れぬ勢力になりつつあった。一方、翌日には、来訪していた英国東洋艦隊一三隻が、長崎を発してウラジオストックに向い、世界は刻々動いていた。そして、この八月には、朝鮮とロシアの間に通商条約が結ばれると、日本も傍観だけではすまされなくなっていた。条約改正で動きのとれない大隈に代って、枢密院議長伊藤博文は、九月十三日、海軍大臣西郷従道・陸軍中将仁礼景範を伴って、軍艦浪速に乗船し、日本海の情勢視察のため、下関を出発した。

この頃ロシアは、不凍港を求めて南下政策をとっていた。さきにコンスタンチノーブルの奪取を計ったが果さず、ペルシャ湾の進出を試みたがこれも失敗し、ベルリン条約が締結されると、一転して極東方面の開発に眼を向け、シベリア鉄道の建設に取り掛かっていた。英国艦隊の来日の目的も、一つにはロシアの動向を視察するためであったが、日本も遅まきながら動き出した。後藤も遊説の先々でこれらの世界情勢は説明したが、いち早くこのことを警告したのは矢野であった。矢野はヨーロッパ視察中、ヨーロッパ諸国の情勢を記者の眼で分析し、帰国後、もしこのシベリア鉄道が完成すると、将来必ず極東における一大禍因になるであろうと警告した。この論説の発表が、矢野の『シベリア鉄道論』であるが、伊藤博文の動きを知った藤田は、久しぶりに矢野に手紙を書こうと思いつき、報知社に寄った。党務もあったがその後の報知社の空気も心配であった。しかし、壮士達の溜り場としての報知社は少しも変わっていなかった。

藤田は三木を呼んで相談した。

「俺の顔を見ると逃げ出す奴もいるが、少しも変わっていないのう」

三木は申し訳なさそうに顔を掻いていた。

「党の方は心配ないが、これでは新聞の評判が悪くなるぞ」

「その通りでございます。社の空気も変わってきましたが、大同団結に悲憤慷慨する党員の中には、論説を書かせろと詰め寄る者ばかりでしてー」

三木はこう言って後を濁した「逆戻りは許されぬぞ。読者が離れる」

「それを心配していますが、既に紙数が減っております。社長の引退がこう響くとは思ってもおりませんでした」

「そんなことだろうと思った。矢野さんに手紙を書くついでに寄ってみたのだがー」
ここまで藤田が話すと、三木は話を折るようにさきをとった。
「貞雄さんにもこのことは相談したのですが、私達の面子にこだわって知らせなくても、兄貴もそういつまでも家族は放ってはおくまいとのことでした」
これを聞いや藤田は急に声をあげて笑い出した。
「そりゃそうじゃのう。家族は放ってはおけぬのう。あと一、二か月もすれば帰って来るか。ならば、わずらわしい話はしらせることもないか」
藤田が納得すると、丁度そこへ箕浦が外出先から帰ってきた。
「御大がいないと、社の空気が変わりましたなぁ」
藤田は遠慮なく話した。
「そうであろう。わしも注意しているのだが、わしではにらみがきかぬのじゃ」
穏健な箕浦はどうしょうもないといった顔であった。
藤田も矢野が帰京すれば、また、社の緊張感も変わるだろうと思い、それ以上追求しなかった。

藤田は留守の間、尾崎がいない今、報知系の改進党委員が箕浦一人になるため、日を置いては党務の整理を急いでいたが、箕浦は泰然としていた。
「心配無用。上昇気運にある時は、何事も事はいい方向に運ぶものじゃ。何かの時には民間大臣がいるわい」
こういう時の箕浦は頼もしかったが、ここでも矢野の話が出て、藤田は苦笑した。
「それよりも準備は出来たか。資料集めも大変であろうが、先ずは健康第一、矢野も洋行先で病気で困ったと聞いたが、酒はあまり飲むなよ。大事な時じゃ」
藤田は神妙に聞いていた。矢野と離れた今、面と向かって酒好きの藤田に忠告出来るのは箕浦だけであった。

日本海の視察に出掛けた伊藤一行は、九月二十四日ウラジオストックに寄港し、十月一日舞鶴に帰国した。
その頃矢野は、銃を片手に佐伯の山野を跋渉し、キジや鴨猟を堪能して英気を養うと、厳冬を前に帰京を急ぐことにした。この帰京の間に、矢野の頭には、『経国美談』につぐ次の著述の構想が出来上がっていた。矢野はヨーロッパの大陸からロンドンへ渡った時、世界に雄飛

する大英帝国の隆盛を眼の前にして、同じ四面海の条件を満たす日本の遅滞が嘆かわしかった。そこには封建時代の鎖国という足かせがあったが、これからの日本は、海を利用する海事思想を普及させ、特に若者の冒険心を誘って、海外への眼を開かせねばならぬと思っていた。その長年の夢が、郷里の海を見ることによって、物語の構想となって脳裏にちらつき始めていた。

ー大分県豊後国南海部郡旧佐伯藩領ニ日向泊ナル一漁村アリ、昔神武帝東征ノ時、龍舟、此地ニ泊セシヲ以テ日向泊ノ名アリ、海浜砂磧中ノ一小井、潮来レバ、海水ノ浸ス所トナリ、潮去レバ即チ現ル、而シテ其水、清冽塩気ヲ帯ビズ、伝ヘ云フ、帝、行営ヲ置クニアタリー

矢野の頭の中には、既に物語の書き出しが活字になっていた。

しかし、帰京した時の諸般の事情は、矢野が望む思う通りにはさせてくれなかった。大隈邸からは、再三矢野の帰京を問い合わせる使者が足を運び、何よりも心を痛めたのは報知社の衰退傾向であった。

三木は報知社の現況を矢野に報告し、矢野に復帰を要請したが、引退声明を公表した矢野は容易に首を縦にふらなかった。三木や小栗の苦悩を見るに見かねて、藤田は腰を上げた。

「矢野さん。報知だけはつぶすわけにはいかないでしょう」

藤田は矢野の弱みを知りぬいているだけに、単刀直入に訴えた。

「茂吉。まさか半年でこうなるとは思わなかったのう。大隈さんの入閣も、変なところで影響が出てきたのう」

矢野も報知社が再び壮士達の集合場になるとは考えてもいなかった。

「このままでは、また昔の政論だけの新聞に逆戻りして読者が離れる。そんな時代ではないのだが、奴等はそこがわからぬ。奴等に新聞の使命を理解しろといっても無理だが、大黒柱が抜けるとがたがたになる。そんな弱い基盤ではないと思っていたのだがー」

藤田は矢野の方針がまだ浸透し得なかったとでも言いたそうであった。

「社に顔を出せば、大隈さんに弁解出来なくなるしのうー」

矢野は長嘆息した。

「矢野さん。政治の方は一線を引く。これは党が責任をもつことにして、報知社だけは何かの方法を考えては如何ですか。社が倒産しては矢野さんの今までの苦労も報われぬし、党としても拠点をなくすことになる。これば かりは大隈さんの耳には入れたくなくてー」

藤田は矢野の意中を察して、報知社の後見にだけしぼって懇願した。

矢野は眼を閉じたまま暫く考えていた。

「よし。経営の面倒だけはみることにする。社業も一文士の立場からは参加もするが、政治に関する言動は一切無縁にする。ただし、だらだらと当てにされても困る。一年に限って援助する。これでよかろう茂吉」

「やれやれ、ほっとしました」

藤田も一安心の呈であったが、

「その代わり、政界からの防波堤を築かねばならぬが、厄介な仕事が増えました」

と、頭に手をやって苦笑した。

「忙しい時に申し訳ないのう。思うようにならぬわい」

矢野は断りながらぽつりと洩らした。矢野は大隈の誘いには信念を貫き通したが、一旦矢野の報知復帰が知れると、社全体の雰囲気が、きりりと締まるから不思議であった。この頃から矢野は、かねて構想の海洋の物語を『浮城物語』と題して、起草に取り掛かった。

この間、後藤の勢力拡大を恐れた政府は、機関紙である『政論』を、治安を妨害するものとして発行を停止させたが、一方では、陸軍中将島尾小弥太が、公然と保守中正派を組織する有様であった。しかし、このくらいでひるむ後藤ではなかった。十二月になって、内務大臣山県有朋が欧米の視察に東京を出発すると、後藤はこれと対抗するように、東海道・北陸一円の遊説に出かけ、こうして新しい年を迎えることになる。

明けて明治二十二年、矢野は久しぶりに家族水入らずで正月を祝い、藤田は出発を前にして慌ただしい正月であった。藤田と慶応で教えを受けた先輩の荘田平五郎の送別会は、一月十二日、両国中村楼で盛大に行われた。

矢野は自分の体験から、健康に注意するよう促しながら、来年の国会開設を控えて、選挙の準備に遅れないことと、自ら好評を博した外遊見聞記の寄稿を依頼して藤田を励ました。藤田は矢野に五年遅れて勇躍洋行の途に

ついた。

藤田を送り出した矢野は、再び報知の再建に意を注ぐことになったが、政論新聞化した報知をもう一度読者中心の新聞にするには、読者を引き付ける読み物が欲しかった。矢野が『浮城物語』を急ぐのもそのためであった。矢野は草稿を急いで報知紙上の連載を考えていた。

この時期、枢密院における憲法草案審議は終り、皇室典範・貴族院令・議院法や選挙法等の附帯法令も完成し既に天皇の裁可を得て、政府はこの日を、神武肇国紀元二五四九年の佳節を選び、二月十一日に発布することにした。

当日、新宮城正殿には、文武百官及び府県会議長が招集され、天皇の詔勅が下されて、憲法発布式が挙行された。

枢密院議長伊藤博文は恭しく憲法を捧呈し、天皇御手づからこれを内閣総理大臣黒田清隆にお授けになった。

維新以来、幾多の志士が鮮血を流し、あるいは民権運動で、獄窓の責苦を浴びせられ、今ここに新生日本の門出ともいうべき憲法をいただき、国民はその内容を理解する如何を問わず、歓呼をもってこれに応え、国内いたる所で、盛大な祝賀会が催された。ただし、当日、不敬事件として誤伝されていた、文部大臣森有礼は、この盛典に参列を前にして、刺客に見舞われるという不幸な事件もあった。

一方、維新の功労者の墓前には勅使が派遣され、この日を祝って大赦令がしかれた。西郷隆盛が賊名を除かれて正三位を贈られ、勤王の殉国者、藤田誠之進・佐久間象山・吉田松陰等に正四位が贈られたのはこの日である。いずれにしても、日本にとって画期的な一日であった。

矢野は、その昔民権運動華やかなりし頃、自ら憲法を草案したことがある。ヨーロッパを視察した伊藤が中心になって、結局はドイツに信奉して制定した憲法だけにその内容は大凡の見当はついていたが、後日ゆっくり検討しなければならぬと思っていた。

ところが、翌日、黒田清隆は各地方長官を鹿鳴館に招待し、その席上一つの宣言をした。この宣言は憲法の内容よりも先に、各新聞記者の口によって各方面に伝えられた。議会の開設されないこの時期、この宣言は今でいう政府の施政方針演説に当たるものであったが、矢野はこれを聞いて唖然とした。

前文は、憲法発布の意義と行政のあり方について説き第二段は議会開設に当たり、議員の選に当たる者の心構えを明示しているが、次が問題である。

憲法は敢て臣民の一辞を容るる所に非ざるは勿論なり。唯だ施政上の意見は、人々其所説を異にし其合同する者相投じて団体をなし、所謂政党なる者の社会に存立するは亦情勢の免れざる所なり。然れども政府は常に一定の方向を取り超然として政党の外に立ち至正の道に居らざる可らず。各員宜く意を此に留め不偏不党の心を以て人民に臨み、撫馭宜きを得以て国家隆盛の治を助けんことを勉むべきなり。以下略

報知社内はこれを知って喧々囂々、急に騒々しくなっていた。

「政府は常に一定の方向を取り、超然として政党の外に立ち、至正の道に居らざる可らずとは、一体こりゃ何じゃい」

「政府は政党の勢力の外に超越しているだと」

「政府は絶対で、外からの掣肘は受けることなしということよ」

様々な意見がとび交っていると、箕浦がそっと矢野の傍に寄ってきた。

「やられましたな」

箕浦の言に、矢野は即答で返したが、そのまま黙ってしまった。

「政府も語るに落ちたな」

その夜、矢野はいろいろなことが錯綜して眠れなかった。

ー大隈さんの入閣に際して、条件をつけた覚書が大分効いて先手を取られたー

効果はあったと独りで苦笑してみたが、政府は政党に左右されないとは、要は政権のたらい廻しを勝手に約束したようなものではないか。あの覚書が邪魔になるはずじゃ。

と思った。

ー結局は引退していてよかった。伊藤さんの腹は見えすぎていた。福沢さんではないが、正論を曲げてまで節を疑われることはないー

矢野はこう思い直すと、気が楽であった。

数日後、二月十五日、憲法制定の責任者である伊藤は官邸に各府県会議長や議員百余名を集めて、この憲法発

布を祝福したが、この時も黒田と同じ発言をした。
伊藤と黒田の見事な意志統一であったが、矢野は腹も立たなかった。ただ、世間ではこれを政府の超然主義の宣言と言いならしたが、これが尾を引いて、政権の薩長専制の悪弊が大正まで続いたのは、日本にとっても損失であった。

こんな政界の駆け引きに無縁になった矢野は、予定通り『浮城物語』を報知紙上に連載し始めたが、これがまた『経国美談』以上の反響を呼び、再び読者を取り戻すことに成功した。矢野はこの方が嬉しかったが、続いて起きた政界の変動には、さすが政治に無縁になった矢野もあっと驚かされた。
三月二十二日、さきに暴漢に襲われた文部大臣森有礼の代りに、逓信大臣榎本武揚が廻ったが、その後任に、こともあろうに、あの大同団結生みの親の後藤象二郎が翻然と入閣したからである。
矢野は直感した。
ー伊藤さんもなかなかやるわい。うるさい奴は次々に懐柔する。しかし、誰が一体仲に入ったのであろうか。案外、犬養の奴が大隈さんと後藤の間を飛び廻ったのかもしれぬが、後藤さんも同志を売るとは情け無い。さぞ寝心地が悪かろう。内閣も評判を落とすが、大同団結組の激怒が眼に浮かぶようじゃー
矢野はこの時ほど、政界を清算していてよかったと思ったことはなかった。まるで住む世界が違うようであった。
だが、一旦魔手が大隈さんの身の上に延びてくると、さすがの矢野も、拱手傍観だけでは済まされなくなってきた。